The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

宮崎県における綴方教育の一事例

—「佐藤実」について—

宮崎大学教育文化学部　菅邦男

キィワード：西臼杵郡上野小・押方小・文集「芽」

1.上野小への赴任

昭和十年五月、『昭和十年版　年刊　日本児童詩集』（全日本綴方倶楽部編）が東宛書房から刊行された。発行者は千葉春雄である。この中に宮崎県関係の指導者として、木村壽を初めとして六人の名前が見える。この当時の綴方教師としては宮崎県関係では木村壽が知られるが、当然の事ながら、他にも熱心な指導者はいたのである。これらについては追々発表していくが、今回はその中の一人である「佐藤実」について述べることにする。「実」は「ジツ」と読む。

佐藤実は昭和六年に、宮崎師範本科第一部を卒業し、西臼杵郡上野尋常高等小学校（現・高千穂町）に赴任している。十年版『日本児童詩集』に掲載されたのは、この上野小での指導作品である。一篇のみである。

おとうさん　　馬原重利
宮崎県西臼杵郡上野小学校
佐藤　実指導〈芽〉

おとうさんが
ばしやひきからかへつてきた
のこくづのあせが
ながれてゐる

上野村は農業や林業を生業とする村である。この子の父親は、馬車で原木を出す仕事をしていたのだろう。木を切った時の鋸屑が、汗にまみれた体に付いていたのである。労働を描いたところが評価されたのであろう。

上野村は、自給自足が可能であり、教会も建っているという村でもあった。上野尋常高等小学校も、当時、児童数七二九、学級数一四という、当時の山間部としては大きな学校であった。

佐藤實は、昭和六年から九年まで、この上野小学校に在職している。いつから綴方指導を始めたのかは定かでないが、それが明確な形で現れるのは、昭和九年度、三年生（男組四十四名）の担任になってからである。上野小最後の年であるが、文集『芽』を発行しているのである。

2.　文集『芽』の発行

『芽』は各学期一冊、計三冊からなる。前述した「おとうさん」もこの文集に掲載されたものである。

当時の卒業生の話ではそれ以前にも綴方の指導はしていたが、文集は出していないようである。自給自足の村ではあったが、経済的に無理だったのかも知れない。また佐藤実以外に綴方の指導に打ち込む教師はおらず、文集を出すような気運も学校にはなかったのである。

昭和九年にそれが可能になったのは、保護者の一人に医者がおり、文集を出す費用を負担してくれたからである。この病院には図書室があり、村の青年や子どもたちに開放していた。当時、村に本がなかったことを考えてのことだという。講談本など大人向けの本・雑誌が多かったが、それに混じって世界文学全集や日本の名作、少年倶楽部等の雑誌もあり、学校帰りに寄るのが楽しみだったと当時の生徒さんは言っている。こうした人物だったから、佐藤実の文集発行にも理解があったのである。

これ以外にもたびたび寄付していたようで、文集「芽」には、「読物を買ってくれ」と多額の寄付を戴いたので今から半年間「佳い綴方」を取りますという「お知らせ」も載っている。

なお、これに関連して言えば、一学期の文集の終わりに「短詩について」という佐藤実の文章があり、短詩の説明のあと、「東京の菊地知勇先生の学校の尋三の生徒のうたつた短詩を、三つ四つかりませう。」とあり、例を挙げて、「今から、短詩も作つてもらひませう」と述べている。

3.　文集『芽』の構成

文集「芽」は、目次によれば、一学期が全百三十二頁、二学期不明（現存四十六頁）、三学期は九十二頁である。

内容は、綴方、詩、童話、観察日記、手紙文など

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

である。それぞれに細かな評がついている。

綴方には「きめられた題の文」と「すきな題でつゞつた文」とがあり、評において、表現面の指導と生活面、倫理面での指導がなされている。

表現面でで目に付くのは、「方言を使わないようにしよう」と再三言っていることである。「もし、方言が、も少し少なかったら、それこそ大した文です。」と言った言い方をしている。それに「知っているだけは漢字を使え」、「素直に、すらすらと書け」、「くわしく書け」といった類の指導である。これが文章に即して、かなり具体的に述べられている。

倫理面でも、例えば拾った本を床下に隠していて心配でたまらなかったという綴方には、１５行の評が付いているが、そこでは「翌日、本を拾ってかへしたかどうかも、知りたい物ですね。拾ってかへしたなら、崟君の心はうんと善くなつてゐるでせう。」と述べている。綴方を使った生活指導である。

全体に、三年生に対する表現面での要求としてはレベルが高い気がするが、当時の生徒さんたちは、詩や綴方を書くのが楽しくて仕方がなかったと言う。事実、遠足の綴方の中にも、弁当を食べるとすぐに詩を書いて、互いに見せ合う場面が出てくる。これほど詩が子どもの生活に入り込み、自然に詩作していたのである。

佐藤実は、「誤字、読点、句点」以外は子どもの作品にはいっさい手を入れていない。口頭でも「使い古された表現は使うな」といったことを言っていたようであるが、書き直したりはしていない。評による指導である。子どもたちは文集に作品が載ると、とても励みになったそうである。

4. 西臼杵郡押方尋常高等小学校への転勤

昭和十年に佐藤実は同じ西臼杵郡の押方小学校へ転勤になっている。ここでもすぐに綴方の指導を始めたようである。二年生の担任である。

押方小学校関係では、昭和十一年版『年刊　日本児童詩集』に、「ソトデ」（坂本アヤ子）という詩が、また『日本児童文集』には「ヤマイモホリ」（甲斐政尚）という綴方が、それぞれ一篇掲載されている。

文集を出していたかどうかは分からないが、『日本児童文集』には指導者名の後に「にた」とあり、これが文集名だと思われる。が、はっきりしない。当時の生徒さんに聞いても、記憶がないという。上野小の創立百周年記念誌には、佐藤実の思い出と共に文集「芽」のことが出てくるが、押方小の記念誌にはいっさい出て来ない。因みに「にた」とは湿地、沼田のことである。押方小学校は周囲を深い山に囲まれている。区域も広く、詩「ソトデ」の作者坂本アヤ子も、四キロもの山道を歩いて通っていたという。「にた」は、そうした環境に由来する命名であろうか。

5. 短かった教師生活

佐藤実が押方小学校にいたのは、一年間だけである。昭和１１年には職員録から名前が消えている。当時の生徒さんの話によると、出勤したのは一学期だけである。病気のため、二学期からは別の先生に代わったそうである。病気というのは、肺結核である。佐藤実は四月に転勤してきて、一学期の内に坂本アヤ子のような全国誌に載る詩を書かせ、二学期には結核のため休職したのである。したがって本格的な文集を出す余裕があったかどうか分からないが、出したとしても、一冊限りだった。佐藤実は、そのまま学校に戻ることはなかったからである。昭和十年の十二月に亡くなったのである。まだ二十六歳であった。

6. 木村寿、山崎梅夫との交流

佐藤実は当時の生徒さんの話では、小柄で、温厚な優しい先生だった。これは上野小でも押方小の生徒さんの話でも、同じだった。

当時の宮崎県では生活綴方教師として木村寿の名が高く、佐藤実も尊敬していたという。弟さんの話では、木村壽から「共にやりましょう」といった年賀状が来ていたそうである。その木村寿と宮崎静坐会でも交流のあった山崎梅夫とは同じ高千穂町の出身であり、宮崎師範の卒業も一緒であった。共に綴方を志し、議論し合っていたようである。山崎梅夫は当時西臼杵郡鞍岡小の訓導であり、文集「土の子山の子」を出していた。山崎梅夫についてはまた別の機会に述べるが、こうした綴方教師達と交流しながらも、若くして生涯を閉じたが故に、宮崎県にあっても、佐藤実はマイナーな存在でしかない。というより、忘れられた存在である。

しかし上野小にしろ、押方小にしろ、当時生徒だった人たちを、七十年余を経た今日でも、あの頃詩を書くのが楽しかったと言わしめる教師である。そうした青年教師、佐藤実に再度光を当てて見たいと思い、今回、取り上げる次第である。

NII-Electronic Library Service